

トラブル
魔法少女ミサキ
体験版

作・@1039

登場人物

あさみや みさき

朝宮 岬

私立桜ヶ島学園の一年。赤い髪がぴんぴんと跳ねて立っている。正義感が強く弱いものいじめや曲がったことが許せない。小柄で華奢な割には喧嘩でも負けたことがないため、いつの間にか最強伝説ができあがってしまったので、いたってマジメなつもり本人は迷惑顔。背が低いのを気にしている。

変身後は、ショートヘアの小柄な少女になってしまふ。非の打ち所のない美少女なのだが、中身は気の強いミサキのままなので、ギャップが大きい。肌は日に焼けて小麦色。

あさみや あいな

朝宮 愛奈

ミサキの妹で、実は秘かに魔法少女として日夜モンスターを退治している。ちょっと抜けたところがあつて、トラブルにあいやすが正義感が強くて頑張り屋でもあるので半ば強引に魔法少女に仕立て上げられても一生懸命戦っている。少々ブラコン気味で兄に自分を守る従士になって欲しいと思っっている。普段はポニーテールの黒髪だが変身するとライトブルーのツインテールになる。

いずみ れい

泉 玲

ミサキと同室の切れ長の目をした美少年。ルックスも良くて頭もいいのだが、無類のオカルトマニア。黒縁のメガネをかけていて背はスラリと高くモデル並みのスタイル。さらさらの長いストレートヘアを後ろで縛っている。

リリア・アルトウナ

七つの精霊王と契約し数百年の時を生きる七精女帝の異名を持つ大精霊魔法使い。世界中を旅し、五百を超える従士団を持つことでも有名。七大精霊以外にも希少な精霊と契約を結び、人間でありながら闇の精霊王と戦ったこともある。

エラワン

数百年にわたりアルトウナに仕える最強の従士。外見は腰ほどもある長い白髪白髭の長身瘦躯の老人。その本当の姿は4本の牙と翼を持つ伝説の雷精獣だが、かつては黒毛の巨象、魔獣ギリメカラと呼ばれ闇の精霊術師に操られ大陸に雷の雨を降らせていた。アルトウナが闇の精霊術師を倒し、雷精王の力も借りて光の眷属へと転身した過去を持つ。ギリメカラは精霊喰らいとも恐れられ、七つの鼻の先端にある口で精霊を喰らい、精気を吸い尽くす。

かいぎ ごうし

海座 豪史

桜ヶ島学園の不良を束ねる四天王最強のカリスマ。空手部のキャプテン。はりねずみのような長髪でがっしりとした長身。破壊神と呼ばれるほどの圧倒的な強さを誇る。だが、最強と言われる由縁はその強さよりも、野獣のように傍若無人な性格にある。金の精霊従士になつて液体金属化する。

くじらい どくと

鯨井 独斗

四天王の一人。相撲部キャプテン。ダンプカーとも呼ばれ、既に横綱を思わせる風格と巨大なガタイが自慢。男気に溢れる性格だが、獲物を見定めると容赦はしない。水の精霊従士となつて巨大な腹いっぱいの水を操る。

いかり しょうしや

碇 将矢

四天王の一人。弓道部キャプテン。見た目が柔和な優男なのに反して残忍な性格で、弓以外にも投げナイフや銃器も扱える通称スナイパー。木の精霊従士となり自在に植物を操る。

さめじま

きょうた

鮫島 京太

四天王の一人。ボクシング部キャプテン。膝までありそうな長いリーチで敵の首を刈り取っていき、死神と恐れられている。外見も不気味だが口調も不気味。雷の精霊従士となり電撃を放つ。

こばやかかわ なるる

小早川 鳴流

水の精霊王と契約した少女。美帆の娘で一人称はボク。母親の影響で百乃木学園で新体操をやっている。腰まで届く長いストレートヘアと切れ長の目をした美少女。

こばやかかわ みほ

小早川 美帆

木の精霊王と契約した美人ナース。幼い頃新体操をしていてスタイルは抜群。母親譲りの美巨乳で、幼少の頃の経験で身体はかなり開発されている。童顔で身体も小柄ではあるが、本人も知らない理由で身体は成熟しても本質的に加齢していない。そのため、娘と同時期に魔法少女に選ばれてしまった。

ひいらぎ まな

柊 真菜

雷の精霊王と契約した少女。陰陽師の名門柊家の巫女少女。柊美沙を失った本家を建て直すために分家から選ばれた逸材。真面目な性格で本家に対するライバル心もあって気丈に振舞っている。だが、行方をくましました美沙を妹のようにも超えられない存在としても意識していたため、人一倍心配している。

第4章 太鼓スレイヴ

魔法少女と呼ばれる少女たちはほとんどの場合、普段は普通の女の子として過ごすため魔力を抑制していて、やたらに力を使ったりはしない。そのせいか魔法を使うために力を解放したときには、髪の色や服装、容姿の一部が変容することがある。ある意味本当の姿に戻っているということなのだが、普通の人たちからはそれを変身と呼ばれている。

ミサキも魔法少女として変身した姿がオレンジ髪で肌を晒すようなリボンと透明マントに大きなトンガリ帽子という格好になっていたわけだが、玲との夜通しのエッチを通して精力を吸収しながら体力を使い果たすという状態でようやく眠りについて、変身前の姿に戻ったらしい。

「つて、女のままなんだな、やつぱし……………」

「かっかかか。そりゃ、性転換魔法は永続魔法のひとつだからな」

炎精王の高笑いが頭に響くと昨晚の一部始終を覗き見られていたことに気づき、思わず全身が総毛立ってしまう。

「あの様子じゃあ、オレ様が手を出すまでもなかったな。男同士でよくもまあ朝までやり続けたもんだぜ、なあ」

「う、うるさいっ！ つつか、玲が戻ってくるまでこの格好で過ごさせてのか？ ごまかしきれないぞ、これは……………」

再び姿見で変わりきった自分の容姿を確認してみる。透き通るようなオレンジ髪は落ち着いたとはいえやっぱりオレンジ色に近い茶髪。うなじも手脚もほっそりとしていて、ウエストも驚くほどくびれている。

「胸はあんまないけど……オレってスタイルいいな………」

小麦色のすべすべな肌を撫でながら自分の身体に惚れ惚れしてしまう。男の時の自分だったら、こんなスタイルでカワイイ子がいたらたまらないだろう。

「ま、そうなるかと愛奈が飛んできて割り込んでくるだろうな………」

今は離れ離れになって暮らしている重度のブラコン妹が思わず脳裏に浮かぶ。愛奈はミサキよりも背が小さくて、今の自分よりも胸がない。その代わりもう少し全体的に柔らかそうな感じはする。もちろんミサキには妹が自分と同じアルトゥナの後継者となっていることなど思いもよらない。

「それにしても………」

ため息をつきながら姿見で自分の身体に服を合わせてみる。サイズはぴったり。問題なのはそれが女子の制服ということだ。

「あのバカ、どっからこんなもの手に入れてきたんだ？」

ミサキが寝ている間に玲が用意しておいた桜ヶ島学園の女子制服。学園共通のデザインとはいえ、男臭い第二プリズンには全く不似合いな可愛らしいワンピーススタイルのセーラー服。オーソドックスな濃紺の長袖の制服に白い襟と大きなリボンタイも真っ白という清冽な印象で、有名デザイナーが手がけたらしく、シルエットだけで女の子らしさが際立ち、生地も上

質で艶がある。ヒラヒラしているのが気になる裾の方は下品にならない程度に短い丈になっている。

「で、白のハイソックスと……あれ、下着は？」

普通に女の子の下着を着けるつもりだった自分にも驚くが、そもそも用意されてないというのはどうすればいいんだろう。

（つつーか、これ着て外に出るってのか？）

とはいえ、女の子になって一層小柄で華奢な身体になってしまったせいでもとに着られる服はない。そもそも外に出る用事もないし、元に戻るまで外出などはしたくないというのが本音なのだ。

コンコン。

「だ、誰だ？」

思案に暮れていたところをいきなり扉がノックされて、なんとかできるだけ低い声で応じる。

「お、俺だよ、一茶だ！」

「な、なんだよ、もう昨日みたいなのしてやんねえぞ……」

思い出すと背筋が寒くなるから顔も見たくない。だが、蛭江兄の様子はいつもと若干違う。

「ち、違っつてば！ 大変なんだ！ な、なんでか分かんないけど四天王のやつらが昨日のステッキを探して……お、俺たちが持ってたって誰かがチクったらしくて……い、いきなり空手部のやつらに拉致られて……」

矢継ぎ早にまくし立てる蛭江兄。どうやらミサキが寝ている間に隣の部屋から連れ去られた蛭江兄弟はさつきまで武道場に監禁されていたらしい。そして次茶が人質にされて、一茶はステッキを取りに行くよう脅されているらしい。

「わかった……後はオレに任せとけ……」

好きでもない肥満兄弟だが、小学校の頃から面倒をみてきたのもあるし、監禁されても二人はミサキのことを売らなかつたのだ。身体は女になったとはいえ、男の心意気としてミサキのやるべきことは決まっている。

「心配すんな。昨日見ただろ？ オレはもう魔法少女なんだから、魔法で今度こそあいつらぶっ倒してやるよ！」

不本意ではあるが、僥倖でもある。精力は昨日充分補充しているし、炎精王の力を借りれば後が怖いが、とりあえず四天王とはいえ生身の人間相手には充分すぎるはずだ。

「かつ！ オレ様もその小僧どもの目的には興味があるからな。仕方ねえから手は貸してやるよ」

一茶にはすぐにステッキを持ったミサキが来ることを伝えに行かせ、二人が解放されるから乗り込むことにする。

「ひ、人助けのためだもん……」

小麦色の肌を晒していた少女は仕方なく馴れないセーラー服を被ると、真っ白なりボンタイを着ける。

「ま、とりあえず……し、下着はいいや……」

股間がすーすーするのは気になるが、かといってサイズも合わないトランクスを履くのも変だと思い、そのまま外へと飛び出していく。

「おい、ホントにちゃんと手助けしてくれるんだらうな？」

「かかかつ、ま、とりあえず精霊魔法の初歩は教えといてやるよ。人間相手なら火の玉でもぶちかましゃ一発でおとなしくなんだろう？」

ミサキ自身、精霊魔法というか魔法自体を一度も見たことはないが、なんとなく想像はできる。炎を司る精霊の最上位に位置する精霊王が力を貸すというのだ。四天王などといっても人間界でケンカが強いだけの相手なら敵ではないのだろう。

新米魔法少女は頭の中で精霊魔法の教育を受けながら一目散に武道場へと駆けて行く。下着も着けてない大きな杖を持った少女がワンピースの裾をひらつかせながら女っ気に縁のない第二プリズンを走っていく様はさすがに生徒たちの目を引いているが、そんなことを気にしている場合ではない。

第二プリズンの武道場は格闘系の部活とその部員の多さゆえにちよつとしたスタジアムクラスの大きさを誇っている。五角形の屋根が特徴的で校舎の裏手にある林の中に聳えている。

「ふん、魔法でもなんでもいいや。今度こそ、海座をぶっ飛ばす！」

道すがら脳内で魔法に対する教育を受けたミサキは武道場に着く頃には初歩の精霊魔法なら扱える気になっていた。人間相手なら初歩でも充分な脅威となる。

「ぶっ飛ばそうが、燃やそうが構わんが、なんで人間界の小僧どもがアルトウナの鍵を探してるのかだけは聞いておけよ」

グリフオンの言葉に意外とまじめなのかなと思ってしまう。そんなことを気にすると思えない非道な精霊だと思っていた。もちろんステッキを探しているということは四天王は何かしらの情報を持っているに違いない。何も分からずに魔法少女にされたミサキにとっては今はどんな情報でも欲しいところだ。

「心配すんな。ぶっ飛ばしてから、ゆっくり火あぶりにして聞きだしてやるよ」

そうほくそ笑んでセーラー服姿の魔法少女は武道場へと続く石段を登っていく。もちろん相手が精霊魔法使いの魔法少女が来るのを承知の上で待ち構えているなどとは思ってもよらなかった。

武道場は一階部分に空手、柔道、相撲、弓道、ボクシング、合気道、剣道、レスリング、更にはテコンドーやキックボクシングなど様々な格闘部のための道場や練習場がそれぞれ作られていて、一大格闘施設と化している。二階には大浴場やトレーニングジム、研修室などもあり、その上が各種の大会や試合の際に使用される通称コロシウムと呼ばれる試合場となっている。三千人は収容できるというスタンド席を擁し、公式試合も行われるほどの設備を誇る本格的な試合場だ。

「ここだな……」

コロシウムの分厚い扉を押し開けると試合場へと続く通路が延びる。普段は板張りになっているだけで何も無いフロアには、魔法少女を待ち構えていた二人の男が佇んでいる。カーテンを閉じ、照明も落ちている暗い中に冷たい緊張感が張り詰める。

待ち構えていたのは四天王のうち二人で、ダンプカーと呼ばれる巨体と怪力を誇る相撲部

主将の鯨井独斗、それに弓矢以外にもナイフや銃器も扱えるというスナイパーの異名をとる弓道部主将の碇将矢。海座の姿はない。

「ふん、ずいぶん待たせやがる」

坊主頭のいかつい顔同様、長ランの制服越しにも分かる筋肉と脂肪で盛り上がった身体つき。突き出た腹は一見すると柔らかそうだが、実際に殴ってみれば、殴った側が岩でも殴ったかと思うほど拳を傷めることになるだろう。

「へえ、ずいぶんかわいいじゃん」

碇将矢は真つ白なYシャツとスラックスは皺一つなく、サラサラヘアの長髪と涼しげな顔に微笑が似合ういかにもなイケメンだが、目の奥からは冷たさしか感じられない。他の四天王に比べて断トツに劣った体格だが、武器を使う器用さと正確さ、そして残忍さは他の追隨を許さないという。

「四天王の二人が仲良く揃って待ち構えているなんてな。あんた達がなんでこのステッキを探してんだ？」

セーラー服姿の魔法少女がアルトウナの鍵を掲げるとようやく照明が点き、妖しく輝く魔法の杖が照らし出される。そして、スタンドから見下ろしてくる相撲部と弓道部の部員たちの姿もミサキの視界に入ってくる。だが、部員たちの表情は一樣に虚ろなのが気になる。

「袋のねずみみて感じか。ま、返り討ちだけだな……」

とはいいつつも、魔法の杖を狙うという不可思議な目的を持った四天王の二人からは、昨日は感じなかった妙な違和感を覚える。それが精霊魔法使いとなったからこそ感じる精霊力

のざわつきだとまではまだ分からない。

「炎精王との契約により我は精霊の理を得ん！」

レクチャーされた通りの言葉と同時に杖を振るうと、足元から精霊力を喰らうように吹き上がる炎が小さな身体を包み込んでいく。セーラー服が輝きながら消失し、代わりに精霊の炎が小麦色の肌を包み込み、髪が透き通るようなオレンジ色に染まる。精霊魔法使いミサキへと変身した美少女の身体を包み込んだ炎は魔法衣へと変わっていく。トンガリ帽子とマントが現れ、一旦身体を包んだりボンは更に輝きを増し、さっきまで着ていたセーラーに似た身体にフィットする魔法衣に変わっていく。

「あれ？ これ？」

「かかつ、さっきまで着てたのが良さ気だったんでな。サービスしてやったんだよ」

とはいいつつ、肌も透けそうな薄手の生地で、下着もないし、丈も短い。かわいらしいと言えば、かわいらしいのだが、やっぱり下心を感じるコスチュームだし、何よりミサキはそんなかわいさもいやらしさも求めていないのだが。

「ま、まあ、いいか……さあて、わざわざ持ってきてやったんだ。理由を説明しろよ」

虎穴にいらすんばと言わんばかりに試合場の中心に立っている二人に向かって不用意に歩み寄っていく。

「ふふつ、魔法の女装少年か。いや身体も女の子なんだよね。まあいいや、こつこつことさ」
涼やかな言葉と同時に錠が手を振り上げると、板張りの床がガタガタと音を立てて震えだし、バキバキと割れながら高速で飛びあがってくる。宙に舞う木の破片がナイフか矢のよう

に飛来する。

「おわっ……な、なんだこれっ!？」

俊敏に飛びのき、避けきつてみせる。だが、木を使った攻撃なら今のミサキには通用しない。ステッキを振り上げ精神を集中する。

「ハルフエルディグリフォンバルファガンウトラウグベリアベリユウトウ……」

フレイルム・アロー

赤い竜嘴!」

本来なら精霊の力はその媒介となるものがなければ具現化は不可能。だが精霊魔法使いが持つ鍵は精霊界と人間界を繋ぐ物。つまり鍵自体が媒介の役目を果たす。ステッキに仕込まれたルビーのような赤い光球が燃え上がるように炎を放ち、それが炎の矢と化して襲い来る床板の欠片を焼き尽くしていく。

「おお、すげ……」

我ながら自分の力に驚いてしまう。だが、気を抜いた瞬間、視界が大量の水しぶきに覆われる。

「っ。ぶああっ!」

魔法少女の小柄な身体は消防隊の放水を食らったかのように壁まで吹き飛ばされてしまう。「な、な、何なんだ、これ……?」

びしょ濡れになったセーラーとマントが肌にくべつたりと張り付いているが、その気持ち悪さを気にしている場合ではない。うるたえる少女に見せ付けるように、鯨井が口から水をぶつと吹いてみせる。

「み、水芸ってレベルじゃないぞ、これ」

炎を操る精霊魔法使いになってしまったミサキには、目の前にいる二人も同じ精霊魔法使いとしか思えない。

（でも、精霊魔法使いは女しかねないはずだろ？）

「かつ、あいつらがお前と同じように性転換してるようにも見えねえしなあ。だとすれば、あいつらは精霊使いと従士契約を結んだってことだろ。それも、ここまで精霊の力を使うくらいってなると、相当のレベルの使い手と契約してるな」

精霊魔法使いを守る従士には、主となる精霊魔法使いから力を分け与えられる。その力は主のレベルに比例し、精霊王クラスの使い手であれば、従士は限定的とはいえ精霊同等の力を扱うことが出来る。

「水や木を自在に操るあいつらは、水と木の精霊王クラスと契約してる魔法使いの従士ってことか……」

「だとすると、お互い初心者でも、貴様の方がかなり不利になるぜ、小僧」

グリフォンの言うとおり、うる覚えの精霊言語を詠唱しなければならぬミサキよりも自らの肉体に精霊の力を宿している従士となった二人の方が力を行使するのは早い。いかに炎精王の破壊力が凄まじくても、それを具現化するには時間がかかり過ぎるのだ。今のミサキが無詠唱で具現化できる力といえば、せいぜいこぶし大の火球をいくつか放つ程度。

「しかも、よりもよって相性が悪い」

精霊使い同士の戦いにおいて相性は最重要ファクターだ。火は木に強いが、水には弱い。

「相性だけじゃないよ」

計算高いスナイパーは既に罫を仕込み終えている。

「君が炎を操るっていうのは前もって聞いてたからね。今、このコロシウムにはさっきの攻撃で跳ね上がった床板のクズが君と鯨井の攻撃で粉々になって飛び散っている。下手に火を放てば、粉塵爆発を起こすことになる」

粉塵爆発くらいはミサキにも分かる。そして、それが自分に全く影響しないこともグリフォンからは教えられている。火の精霊使いにとって火気はむしろエネルギーとなる。だが、問題なのは、今このコロシウムにはミサキ以外に少なくとも百人以上の人間がいるということ。何をされているのかわからないが、虚ろな表情でスタンドに座っている部員たちは一般の学生なのだ。大爆発を起こしたりすれば、下手をすれば死人が出る。

「き、汚いぞ、お前ら………」

「知ってるよ。それ、褒め言葉でしょ？」

立ち上がるうとする少女の前に巨漢の少年が立ちはだかる。

「ふん、オレあ真っ向勝負で構わねえんだけどなあ」

ずぶ濡れの魔法少女の身体をひよいと軽く持ち上げる相撲部キャプテン。油断したつもりはなかったのに驚くべき俊敏さでステッキを奪われてしまい、最早頼みの綱のグリフォンとすら話すことができない。

「は、放せっ！ このデブっ！！」

「ふん、礼儀を知らん小娘だな。いや、男か？」

不敵に嘲笑う長ラン姿の巨体を誇る鯨井。やはり彼らはミサキが魔法少女になったことを知っている。

「な、なんであんだ達がそんなことを……」

「ある人に言われただけさ。火の鍵を手に入れたやつを連れて来いってね。それ以上のことは僕らは聞かされてない」

「ある人って、誰だよ？」

「後で分かる。まあ、その前にやらにやらんこともあるしなあ」

にやにや笑っている相撲部の主将。涼やかだった碓の笑みも冷たさが増しているように見える。

「何のためか知らないけど、捕らえた精霊使いに充分精気を吸わせてこいって言われててね。そのためにうちの部員たちを用意しといたんだよ」

にこやかに話しているが、その意味していることはミサキの背筋を凍りつかせるに充分なものだ。

「まあ、血の気の余ってる鯨井はともかく僕は精気を吸われるなんて嫌だからさ。その代わりに彼らのやる気を奮い立たせる手伝いくらいはしてあげたいんだ。優しいだろ、僕」

スタンド席に虚ろな顔で座っている部員たちを指し示しながら心底嬉しそうに話している。碓の性格はミサキも玲から聞かされている。試合に負けた部員や部の秩序を乱す者、部に敵対する者に対して容赦なく行われる残忍で冷酷な拷問の数々は最早伝説と化しているという。戦いにおいては飛び道具を使用することでスナイパーなどと呼ばれているが、陰では処刑人

とも呼ばれているのだ。

「そんなわけで僕が預かった能力は植物で出来たものを操る力なんだ。こんな風にね」

碇の足元には縄の束が置かれていた。それが彼の合図で触れることもなく蛇のように鎌首をもたげたかと思うと、鯨井に担がれたミサキに向かって伸びてくる。

「う、うわ、ちょ、おいつ！」

「おいおい、オレまで一緒に縛らんでくれよ」

そう言うのと軽々と魔法少女の背中を片手で支えて持ち上げる。空中で仰向けにされたミサキがうろたえる間に身体には薄気味悪く蠢く縄がするすると巻きついてくる。

「や、やめろっ！ この変態野郎っ！ 何考えてんだよっ！！」

「何って、抵抗されても困るからねえ。半分は僕の趣味だけど」

微笑とは裏腹にミサキの肌には容赦なく縄目が食い込み、縛り上げられていく。首から股間に伸びた縄が背中に戻ったかと思うとキリキリと柔らかな秘肉に食い込んで締め付けられる。淡い膨らみを強調するように胸を締め上げられ、手脚に巻きついた縄が尻の上辺りで手首と足首を固定するようにきつく引き締められていく。

「つくうああつ、ま、待って……き、きつ……」

セーラーの薄い生地越しに縄目が秘唇を責め立ててくるし、身体中の肌が同じように擦られ、きつく拘束されて自由を奪われた気分は精神的にもミサキを追い詰めていく。

(やばい……こ、このまま、オレ……こいつらに……)

心は男なのに女の身体にされて無数の男に陵辱されるかもしれないという恐怖が、抗うこ

ともできずに縛り上げられた屈辱と相まって膨れ上がっていく。

「拷問つてのを考えさせると、碇の右に出るやつはおらんなあ」

そう言いながら縄で縛られて更に小さく見える魔法少女を掲げながら、鯨井は試合場の奥に置かれた大きな和太鼓を引つ張つてくる。スタンドからでもよく見えるように真ん中に置かれた太鼓の上に三角木馬に跨らされた囚人のように乗せられるミサキ。

「な、何しようつてんだよ。オ、オレをあいつらに襲わせようつてんじやないのか？」

「おや、男のくせにうちの荒くれどもに輪姦されるのを期待してたのかな？」

「ばっ、そんなわけないだろっ!!？」

「全く元が男とは思えんがなあ……」

うるたえる魔法少女の真つ赤になつた顔を下から覗き込んでくる鯨井の顔にも、今から起こることをいかにも楽しみみにしているのが分かるいやらしい笑みが張り付いている。

「言つたる？ 彼らをやる気にさせる余興をやるんだよ。それに、君が僕たち四天王を恐れ平伏すくらいに虐めてあげないとなあとは思つてたし」

残忍な言葉を事も無げに笑顔で並べる弓道部主将。その手がすつと上がると同時に再び床板が捲れて舞い上がり、尖つた無数の木屑がミサキの身体を取り囲む。

「さあて、次はオレの番だな」

そういつた相撲部主将がその丸太のような腕を振り上げると、いきなり太鼓に平手を叩きつける。

ドオンッ!!

「つきやああつ！」

目の覚めるような爆音と同時に魔法少女の悲鳴が上がる。太鼓から伝わる凄まじい振動が少女の全身を突き抜けると同時に締め上げられた縄目が身体中を擦りたて、中でも太鼓に接している股間には直接衝撃が伝わる上に柔らかく敏感な部分が縄で刺激されてしまうのだ。

「ひあ、ああつ、んううつ！」

更に振動の余波は縄を伝ってまるで全身を包むヴァイブレーターのようにオレンジ髪の少女を苦しめる。

続きは本編でお楽しみください！

Copyright (c) 2009 @039 All rights reserved.

この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。

URL・<http://1039run.blogspot.com>